

いちごのショートケーキ

俺には歳が六つ離れた妹がいた。
俺は小学校の頃からずっと体育5とかで元気だけが取り柄みたいな子どもだったんだが、妹はちょっと体が弱くて少し体調を崩すと何日も熱で寝込んでしまうくらいだった。
そんな事もあってかお互いケンカもほとんどなく本当に仲良く楽しく暮らしていた。
結構、妹に甘くて、いつも何か頼み事されたら断り切れないでそれを聞いてしまう。

例えば、いちごのショートケーキがおやつに出たら、出た瞬間にはもう妹が顔で合図してくる。
俺も馴れたものでそれだけで「はいはい……」って感じで聞いてしまう。
そしたら妹は、たった一つのいちごで大はしゃぎする。あれを見たら毎の一つや二つなんかまじで安いもんだって思った。
本当にそんな何でもない日々を過ごしていた。

俺が高校2年生の時だった。
その日の朝もいつもと変わらない朝のはずだった。
いつもの目覚ましで起きて、いつもの制服に着替えて、いつもの道を通って学校に行く。
そんな何でもない日だったはずなのに、朝起きたら両親がやたらと騒いでいた。
居間に行くとそこで顔面そうはくの妹が横になってうめいていた。

今までの熱とは明らかに違うような感じで、もう誰が見てもわかるくらいに

「苦しい……辛い……」って顔だった。

親父が救急車を呼んですぐ病院に直行、すぐ集中治療室に運ばれた。

妹はいつも「自分の熱のせいでいつもみんなに迷惑かけてるからあたしは悪い子だね」って言ってた。

今思えば、どんなに苦しくてもいつも笑いながら「大丈夫だよ。」って言ってたのか。

そんなことにすら気がつかなかったのに俺は「心配するな、誰もそんな風に思っていないよ」って言ってた。

妹はずっと笑っていた。

俺は、何で小学生の子供がこんな我慢しなきゃいけないんだって本当に何度も思った。

年甲斐もなく「神様、助けてください」とかもやった。

無駄かもしれないってわかってたけど本当にわらにもすがら思いだった。

お見舞いには毎日行ってたんだが妹は全身チューブ姿。俺は初めてその姿を見たとき、本当に怖かった。このまま、もうだめなんじゃないかって……。

学校の部活も休部にさせてもらって友達の誘いも全部断ってずっと学校から病院に直行。

初めは恥ずかしいのか知らないけど「毎日来なくていいよ。」って言われたりした。

でも、病院なんてやっぱりつまらない場所だからすぐに「早く来て！」って言うようになった。

たいていは、母さんがそばに就いていたんだがどうしてもいない日とかできたりしたから

そんな日はこっそり学校休んでずっとついててやってた。

俺あんまりしゃべるのうまくないんだけど、一生懸命話すと妹も笑って聞いてくれた。正直、何度も同じ話をしたと思う。

でもさ、ずっと笑いながら聞いててくれたんだ。

一度、「おまえはよ、俺にはもったいないくらい良い妹だな。」って言った時、とびっきりの笑顔で答えを返してくれた。

あの時は本当にうれしかった。

これ書いてる今でも鮮明に覚えているくらいだからな。

・略・親父は言った。

「先生(医師)の話では、もう長くはないそうだ。」……

次のお見舞いの日に、いつも食べていたようなスーパーで買ういちごショートケーキとは違って専門店の高いいちごショートケーキを買っていった。

いちごも本当に大きくて甘そうだった。それをみて妹は大はしゃぎ。

いちごのショートケーキを渡したら、本当に久しぶりに顔で合図をしてきたんだ。

そのことが本当は嬉しかったけどいつものように「はいはい……」って感じでいちごを渡そうとした。



でも、それを妹がさえぎった。

「今日は兄ちゃんが私のいちごも食べて」って……。
俺は一瞬あっけにとられていた。だって久しぶりのショートケーキでしかも高いやつなのに。
なんでそんな事するんだって聞いた。理由を聞いても
「いいじゃん。」ってくびを振るだけ。
俺も初めはしぶっていたんだがどうしてもって言うから素直にもらうことにした。
その様子を見て妹は本当に嬉しそうな顔をした。
で、一緒に食べた。いちごのショートケーキ。
それで妹が聞いてきた。



「いちご、おいしかった？」って。
俺はうなずいた。本当においしかった。
あの時あらためて思ったのが「食べ物と一緒に食べる人によって味がかわるもんだな」って。
どういうわけか、同じいちごなのに妹の方が甘く感じるんだ。気持ち一つでここまで変わるんだなって正直びっくりした。
その後もいつものように何気ない話をして笑った。
その中で、やっぱり親父が妹に言うんだよ。
「元気になって退院したらどこか行きたいところはあるかい？」って。
俺は、遊園地かそこらだろうかって考えてた。
妹はちょっと考えてから
「家に帰りたい。」「家のテーブルでみんなと一緒にお母さんのごはんが食べたい。」って……。

俺、自分の考えの浅はかさに怒りを覚えたよ……。
今の妹にはそんな当たり前のことですら願いごとに値するほどなのに。
病室にいられなくなってトイレに行って泣いた。もう、わけがわからなくなって。

ついにその日がきた。あのときも朝だった。

母さんが妹の手を握ってた。母さんの手は真っ白になってた。
それぐらい力が入ってたんだと思う。
妹は俺たちが来たことに気付いたらしく妹が本当に小さな声でいったんだ。
いちご、おいしかった？って。
それは前に何度も言った言葉だった。
荒げる呼吸の中なのに、なぜかはっきりと聞こえた。俺はうなずくことしかできなかった。
「次は俺のをあげるからまた一緒に食べような。」って言ったら「今度、食べる時も、あたしのを、あげるよ。」って途切れ途切れに返してきた……。
もう、がまん出来なくなってた。
俺はボロ泣きだった。
いちごなんていらぬからこれからも一緒に話しをしてくれよ。
これからも一緒に笑ってくれよ。
妹は笑っていた。俺は泣いてるのに笑って、お前は苦しいのに笑って。
本当に変な兄妹だったな、俺たち。

あんなに苦しんでいたのに逝く時は本当にあっさりだった。
治ってしまったのかと思えるほど朗らかな顔。ただ眠っているだけにしか見えない顔。
なのに、なんでその顔に白い布をかけるんだよ。
俺たちの顔を見れなくなるじゃないか……。
俺たちともう話せなくなるじゃないか……。
もう泣くことしかできなかった。
あんなに泣いていたのにまだ涙は枯れなかった。
俺はダメな兄ちゃんだった。
ただ会いに行き話をするだけで。
俺はお前からたくさんの大切な物をもらったのに、俺はお前に何か伝えてやれたんだろうか？
俺の気持ち、伝わってたか？
こんな俺たちの日々を誰かに伝えたくて、今こうして文字にしている。
あれから二年、俺は勉強したかいもあり無事大学にも合格し、一段落ついた。
二年たった今でもはっきりと覚えているお前の笑顔。
遅くなっちゃったけどあの時言えなかったあの言葉を言わせてくれ。
いちご、おいしかったよ。
ありがとう。

青い空

小学生のとき、少し足し算、引き算の計算や、会話のテンポが少し遅いあきら君がいた。

でも、絵が上手な子だった。
彼は、よく空の絵を描いた。
ぬけるような色づかいには、子ども心に驚嘆した。

担任の野本先生は算数の時間、解けないと分かっているのに答えをその子に聞く。
冷や汗をかきながら、指を使って、ええと・ええと・と答えを出そうとする姿を周りの子どもは笑う。

野本先生は答えが出るまで、しつこく何度も言わせた。
私は野本先生が大嫌いだった。

クラスもいつしか代わり、私たちが小学6年生になる前、先生は違う学校へ転任することになったので、

全校集会で先生のお別れ会をやることになった。
生徒代表でお別れの言葉を言う人が必要になった。
先生に一番世話をやかせたのだから、あきら君が言え、と言い出したお馬鹿さんがいた。
お別れ会で一人立たされて、どもる姿を期待したのだ。

私は、あきら君の言葉を忘れない。

「ぼくを、普通の子と一緒に勉強させてくれて、ありがとうございました」

あきら君の感謝の言葉は10分以上にも及ぶ。
水彩絵の具の色の使い方を教えてくれたこと。
放課後つきっきりでそろばんを勉強させてくれたこと。
その間、おしゃべりをする子どもはいませんでした。
野本先生がびるびる震えながら、嗚咽をくいしばる声が、体育館に響いただけでした。

昨日、デパートのポストカードなどに美しい水彩画と、あきら君のサインを発見いたしました。

野本先生は今、僻地で小学校で校長先生をしております。
先生は教員が少なく、子どもたちが家から2時間ほどかけて登校しなければならないような過疎地へ自ら望んで赴任されました。

野本先生のお家には、毎年夏にあきら君から絵が届くそうです。
あきら君はその後公立中高を経て、美大に進学しました。
お別れ会での野本先生のあいさつが思い浮かびます。

「あきら君の絵は、ユトリロの絵に似ているんですよ。
みんなはもしかしたら、見たこと無いかもしれない。
ユトリロっていう、フランスの人でね、街や風景をたくさん描いた人なんだけど。
空が、綺麗なんだよ。
あきら君は、その才能の代わりに、他の持ち物がみんなと比べて少ない。
けど、時間はかかっても・・・持てない物ではないのです。
そして、あきら君はそれを一生懸命自分のものにしようとしています。
これは、簡単なことではありません・・・そして、素晴らしいことなのです」

あきら君は、空を描いた絵を送るそうです。

その空は野本先生が作り方を教えた、

美しいエメラルドグリーンだそうです。



オムライス

20年前ぐらい前（1985年、昭和60年頃の話）

当時俺の家はいわゆる片親ってやつで、すげえ一貧乏だった。子ども3人養うために、かあちゃんは夜も寝ないで働いてた。それでもどん底だった・・・俺は中学卒業してすぐ働きに出た。死ぬほど働いた。遊んでる暇なんてなかった。



1年ぐらいして同級生に久しぶりに会った。飯食いに行こうって話になった。メニューの漢字・・・読めなかった。読めたのは、一つだけカタカナで書いてあった「オムライス」だけ。同級生は「焼きそばとごはん」って注文した。

無知な俺は「じゃあ俺はオムライスとごはん」って店員に言った。店員、固まっていた。クスクスって笑い声も聞こえてきた。そしたら同級生「さっきのキャンセルね！！俺もオムライスとごはん！！」・・・店出た後、同級生が一言「うまかったな」って言った。「仕事がんばれよ」って言ってくれた。

泣けてきた
心の底から人に「ありがとう」って思った。
そいつは今でも親友です。

大切なこと

江戸時代など封建社会（領主と家臣の土地と軍役の主従関係を中心の社会）



平等の人間が集まって、世の中をだんだん良くしていくようにはできていない
上からの圧力が加わって、人間はいやおうなしに・・・

「身の程をわきまえよ」「けじめ」「～の分際で」 民衆を統治する道具の言葉

解放令1871（明治4）年8月28日太政官布告

「免税地」を廃止（地券発行し土地の所有者明確に！土地の売買で課税）

居住制限の廃止 職業の自由 役目の廃止 身分の解放 が必要

しかし平民は従来通りの〈排除〉を守ろうとした→困惑と不安と怒りを引き起こす

氏神祭礼への拒否、入浴や髪結いの拒否、商品販売の拒否、入会地の利用の拒否など

明治10～20年の大不況 「松方デフレ」大蔵卿、松方正義は不況がはじまっていたのにそれに追い打ちをかけるデフレ政策（官業払い下げの推進、各省庁経費3年据え置き、醬油税・菓子税新設、酒税・煙草税、間接税増税）

農村部大打撃、地主とわずかな自作農だけ生き残るが、小さな自作農や雑業の人々は、地主に田畑を奪われる。農村で食べていけない小作農の子、自作農の5男、6男は出稼ぎや丁稚奉公で都市に流入。

明治20年代以降 日本社会の「家」制度的な会社組織が民間資本で。

明治20年代以後 江戸時代からの排除の意識、就職差別、教育の差別、貧困が差別意識へ。

「古き伝統」より、様々な固定観念にとらわれないことのほうが大切です。

今、親世代と子世代の価値観やものの考え方にギャップがあります。「子ども」に変化が起きている今だからこそ、だめだだめだと思いながら受け継がれてきてしまった偏見の鎖を絶ち切ることができるのでは、と思っています。

戦争が終わったから戦時中のことは全て忘れましょうではなく・・・過去の過ちは、未来へ活かさなくてはなりません。あの時向がいけなかったのか、ではどうすればよかったのか。次に同じような場面に直面したら、どう対応するべきなのか。

悲しいことに、この世にはあらゆるところに差別がはびこっています。

私たちは、学ばなくてはならないのです。2度と同じ過ちを繰り返さぬように。

